



TITLE:

対大阪大学阿部ゼミ・インゼミ報告

AUTHOR(S):

遠藤, 量太

CITATION:

遠藤, 量太. 対大阪大学阿部ゼミ・インゼミ報告. 岩本ゼミナール機関誌
1999, 4: 102-107

ISSUE DATE:

1999-03-24

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/56871>

RIGHT:

対大阪大学阿部ゼミ・インゼミ報告

文責：遠藤量太

11月30日に京大会館で大阪大阿部顕三ゼミナールとの勉強会が行なわれました。岩本ゼミ側からは2・3回生計5人がプレゼンテーション・質疑応答に参加しました。

岩本先生も当日仰有っていたように、実践政策的な問題に関するディベートではなく理論的な内容の勉強会というのはゼミとしても初めての試みでした。

以下、当日までの流れに沿って今回のインゼミを総括したいと思います。

当日までの経緯

テーマ設定

今回が初の交流となる阿部ゼミは貿易論が専門のゼミなので、その範囲内で論争のテーマとなりそうなものを考えたのですが、日米貿易摩擦の折のように時事的で華々しいテーマは見つけられませんでした。候補としては色々上がったのですが、どれも対立軸が見つけづらかったのです。

僕自身もテーマ設定に関わっていた対関学の論題「途上国にとっての自由貿易の是非」を提案すると、阿部ゼミ側もそれを了承してくれました。ただ、具体的な対象国を一つに絞る段階となると行き詰まってしまい、また相手側が具体的・実証的な勉強よりも理論的な勉強を強く望んでいたのも、特に対象国はもうけず、より一般的・理論的な観点から立場を違えて主張をするということになりました。

ディベート形式の是非に関しては、双方が今回のテーマで無理にディベートにこだわることの必要性を感じず、またそうすることの難しさを感じていたために、「違う立場から一つの問題を考えるのだから、白黒つけなくても生産的な議論はできるだろう」ということで話がまとまりました。

それにしても、「途上国」「自由貿易」という言葉の定義そのものが難しく、また後に述べる様にしっかり勉強しようとする非常に高度な問題でもあるので、テーマを噛み合わせることは最後まで苦労しました。結局は最後まで噛み合わなかったと言えるのかもしれませんが。

相互の勉強のスタイルやペースが大きく違っていたこともありますが、「ディベート」という箍が外れたことで、それぞれの問題意識をしっかりと噛み合わせる必要性が薄れたこともその原因でしょう。

具体的内容

交渉の結果、岩本ゼミが自由貿易の立場で、阿部ゼミが保護貿易の立場で考えることに

なりました。

新古典派側からの保護貿易に対する批判にあたってみると、特に輸入代替の非効率性を実証例をあげて非難するという論調のものが多いのですが、そもそも幼稚産業保護論のような途上国に特別詭えの理論は自由貿易論側にはないのですから、保護論側の主張に対する否定という形で自由貿易擁護が展開されるのも当然です。

ここで問題となるのは、新古典派自由貿易が想定するような仮定条件に対して提起された「新理論」をとりこんだ保護貿易論です。それは収穫一定という伝統的自由貿易論の前提を取り払ったケースを想定していますから、そうした場合も自由貿易を行なうことにメリットがある、と示さなければなりません。その段階で行き詰まってしまう、結局は自由貿易論者にしたがって「そうした状況は途上国には一般的ではない」という実証的批判を用いることになりました。

そもそも発展途上国が自由貿易から得るメリットを考えるなら、動学的な経済発展を主軸に据えなければならないはずです。静学的な分析ならば、単に小国・大国という想定しか設けられないからです。そこで、途上国にとっての課題を「産業構造の高度化」とし、それは「需要の所得弾力性が高く、生産技術の高度な産業に特化することである」としました。貿易の拡大が生産性上昇や実質所得上昇、資本蓄積増を通じて一国の技術や要素賦存の水準を変化させるという主張をこちらのメインにしようとしたわけです。しかし、静学的な分析を動学的な成長論と結びつけるのは大変難しいことがわかり、結局は成長過程で貿易が果たす役割を厳密にではなく一般的傾向として取り上げることになりました。

もちろん、あらゆる場合において自由放任が望ましいわけではなく、少なくとも一国レベルでは何らかの貿易政策が最善の策となる場合もあるでしょう。どういう状況のもとで介入が正当化されるのかという問題も介入のもたらす非効率性と並行して調べていきました。

学習の進め方

今年のインゼミのテーマは去年のように一つの共通項ではくくれないバラエティに富んだものとなりました。それは人員配分上の問題としてはねかえり、苦肉の策として関学と阪大のメンバーを「貿易班」として一括し、ある程度まで一緒に勉強を進めて行くことになりました。

阪大向けに勉強してきたこと(比較制度分析の枠組み等)が結果的に対関学立論に活かされたり、対関学メンバーだった二回生の中から二人が阪大班にも参加し活躍するなど、相互にメリットはあったと思います。ただ、場所的な制約のせい(どの班も研究室を使っている)もあるのですが、このために専ら阪大に向けた勉強にとりかかるのが遅くなってしまいました。

それはともかくとして、当日までの大まかなスケジュールは以下の通りです。

まず今年は貿易論をゼミで全く扱っていないという事情を考え、伊藤元重「ゼミナール国際経済学入門」、クルーグマン・オブスフェルト「国際経済～理論と政策 I 国際貿易」を用

いて、貿易班全体に対する基礎的知識のブリーフィングを夏合宿から秋口にかけておこなっていました。

その後はそれぞれが勉強した成果を持ちより班員へのプレゼンを行なうという形で問題の具体化を進め、そして交渉の進展に応じて関学と阪大を区別して勉強が進められていきました。

当日の発表

立論の内容

当日は藤嶋さんに司会をしていただき、京大から先にプレゼンを行ないました。

京大側の立論では、

- ①まず幼稚産業保護や超輸出促進などの貿易政策の問題点（価格バイアスや資源配分の非効率性、レントシーキングや独占の発生など）を静学モデルで示し、
- ②次に自由貿易下では一致するはずの国内の消費限界代替率・国内生産の限界変形率・貿易下での外国企業の限界変形率、の三者の乖離パターンに基づいて市場の歪みを分析し、その場合には政策介入が要請されるが、水際措置（＝貿易政策）ではなく歪みの原因に対する直接的な政策が望ましいことを示しました。さらに、新理論に基づく途上国保護貿易論についても分析しました。
- ③その上で(自由)貿易が経済発展にもたらす波及効果(生産性向上、生産拡大、所得拡大)の連環サイクル、それが比較優位構造に及ぼす影響を示し、自由貿易への転換メリットについても言及しました。
- ④最後に、実証的に保護貿易の非妥当性と自由貿易のメリットを検討しました。

阪大側は、完全競争、収穫一定の2つの条件から4つのパターンを想定し、それぞれ

- ①完全競争で収穫一定の場合には最適関税の理論、
 - ②完全競争で収穫逓増の場合には幼稚産業保護論、
 - ③不完全競争で収穫一定の場合には外国企業による供給独占レントの吸収、
 - ④不完全競争で収穫逓増の場合には戦略的貿易政策
- を根拠として貿易政策が正当化されることを示しました。

プレゼンテーションと質疑応答

両校のプレゼンはそれぞれの章立てに従い必要に応じてグラフを用いながら行なわれました。

質疑応答に関しては、阪大側からは輸入制限策と輸入保護策とのレントシーキングの対称性の是非、関税の賦課による国内予算制約の変化など、積極的な質問がありました。京大側は静学的仮定に基づいた補助金抛棄の継続可能性の是非を質したくらいで、大した質問はほとんどできませんでした。そもそも各々のプレゼンに時間がかかって当日の会場の

時間制約を守れそうになかったため、順番が後になった京大側からの質問がはばかれたこともあります。生産的な質問ができなかった点については京大側の不勉強が責められてしかるべきであり、反省しています。

弁解をさせて貰うなら、阪大側のレジュメは当日の会場で初めて渡され、事前に十分な検討ができなかったこと、京大側は積極的な主張を試みた結果突くべき箇所を抱えていたのに対し、阪大側の主張とその説明は教科書の枠に収まっており、殊更に問題とすべきところが見当たらなかったことも原因です。

今回の成果と課題

内容に関して

上述の通り、少なくとも統一的なはっきりした色の主張は打ち出せました（「保護主義は非効率的である。市場の状況によっては介入が望ましい場合もあるが必ずしも貿易政策に拠るべきではなく、その場合も途上国への現実妥当性は疑わしい」）。そして論点の整理もうまく出来たといえると思います。

「途上国に限らない一般的な問題として、特殊なディスティーション状況下では介入が正当化される場合もある」という主張は、はっきりいって相手とかぶってしまいましたが、両方の立場から検討して同じ結果がえられたことは何も否定的に捉えるべきではないと思います。

ただ、岩本先生のご指摘のとおり、最後まで規模の経済が働く下で積極的に自由放任策を取るべき理論的枠組みを提示できなかったこと、また理論的および実証的分析（一時点での資源配分の効率性）にとどまり、それが動学的な成長過程におよぼす影響についてはごく一般的な理解についてしか取り上げられなかったこと、阿部先生のご指摘の通り、直接投資など重要なテーマの幾つかを取り上げられなかったことなどは、今回の限界であり、今後の課題でしょう。

そもそも、単純に「途上国にとって産業構造の高度化が望ましく、それは所得弾力性の高い財への特化である」とした点も問題であり、もっと厳密に考えるべきでした。

一般に「経済成長＝工業化」と決めつけてしまいがちですが、果たして本当にそう言えるのでしょうか。対関学の勉強過程では「何をもって保護とし、何をもって自由とするか」という問題で悩まされましたが、ことはそれだけに収まらないようです。本当にこのテーマは深く難しく、我々はまだまだ入り口を覗いたに過ぎない、と感じざるを得ません。

ディベートと勉強会

個人的な学習度合のばらつきから、問題意識をゼミ全体として共有することには限界がありました。今年は春合宿以来国際金融理論を勉強してきており、ゼミとして貿易論に対応していなかったのが、当日参加していてもつまらなく感じた人が多かったかもしれません。

しかし、今回のような試みが、張り詰めた雰囲気のもとで行なわれるディベートに比べ

て望ましくないと言われると、素直にうなづくことはできません。

どんなレベルであれ一つの理論に拠って体系立った主張を展開することは、単に言葉を羅列してレトリックで相手を丸め込もうとするより遥かに強力であり、説得的でしょう。しかし僕が二年間の経験から学んだことは、学生レベルではそれは難しいということです。

経済学は、現実のメタファーとしての理論を数学的手法で表します。一人歩きした数式を得意げに振りまわすのと同様に、最初から基本的なことも学ぼうとしないで、あれこれ経済について語ってみたり経済学の非現実性を主張してみたりするのは愚の骨頂でしょう。

かといって、それぞれ理論的に違う立場をふまえて論争するとなると非常に難しく、今回の僕らもある程度までいくとカベにぶつかってしまいました。

阿部先生も「学生時代にはまずしっかりやっておかねばならないことがある」と教えてくださいましたが、特に双方の学習程度や方向性が違う場合には、無理にディベートをしようとしても生産的な結果を生まないのではないのでしょうか。

とはいえ、勝ち負けがかかる場合とそうでない場合とでは、勉強する側のやる気も全く違って来るのは確かです。前者では焦りにも似たプレッシャーがかかりますが、勉強会形式では相手に合わせてしっかり勉強しようという気にならないのかもしれませんが。

去年やこれまでのインゼミのように、学生レベルでも使えるディベートの雛型があればそれに越したことはないのでしょうか。今年は貿易に関してそう言う意味での手頃な論題が見つけれませんでした。

今回の結果は結果として、この問題に関しては来年以降の主役に委ねたいと思います。

ゼミ全体ではなく自分達自身についてだけ言うなら、班員は関学とのインゼミ(現実的問題のディベート)にもメンバーとして参加しており、抽象的な理論と実際との対応関係という点ではある程度までなら補完できたかと思っています。結果論になりますが、先に阪大との勉強会を行ない、それを踏まえた上で関学とのディベートを行なうことが望ましかったのかもしれませんが。

それにしても今回は最後まで自らの不勉強さを噛み締めるインゼミとなりました。性急に結果を求めようとせず、しっかりやるべきことから進めること。こうした地道な努力が一番大事なのであり、そして一番疎かにしてしまいがちである、ということを認識できただけでもこのインゼミの意義は非常に大きかったと思います。

終わりに

反省の意味も込めて問題提起をさせて頂くなら、一つには、今回のように相手校が4つにもなると相手との調整だけでなくゼミ内での調整が必要となり、さらには(対応する自分達の都合ですが)相手間の調整なども必要となって、全体のバランスをとっていくことが非常に難しくなります。ともすればそのことだけに気を取られて、肝心の自分自身の興味関心を疎かにしてしまいかねません。

ゼミ全体を考えて動くのも大事ですが、やはり自分が主体として動くインゼミなのです

から、「自分が岩本ゼミに入って見つけたヤリタイコト」を強く主張する位のわがままさはあっても良いと思います。

もうひとつ、ゼミで集まったときの時間の有効な使いかたも相変わらずの解決すべき課題ですね。今年は阪大班に限らずゼミ全体にメリハリがなかったように思います。

メンバーの皆さんへ。2班にわたり強力なエンジンとしてフル稼働を続けてくれた西丸君、連日徹夜を続けて理論の整理・解説を考えてくれた船橋さん、吸収の早さと当日の見事なプレゼンで皆を唸らせた藤中康生君、よき相談相手でありムードメーカーになってくれた藤中智章君。みんな本当にどうもありがとう！！特に西丸君、あなたのユニークなキャラクターは今後もゼミに語り継がれることでしょう。

関学班も含めた二回生の皆さんへ。阿部ゼミの人達から「僕らはゼミ配当が三回からで、君らと違って去年の蓄積がない。インゼミといわれてもどのように進めるべきかわからない」と何度も言われました。そう言われてみると、確かに僕らの活動は現四回生の方々の教育に負うところが大きいと思います。その意味で僕らがあなたがたにどれだけのことをしてあげられたかを考えると甚だ心許ないですが、教訓だけでも活かして頂けるとありがたいです。がんばってゼミを盛り上げていってください。

最後に、阿部・岩本両先生と榎本ゼミ長以下阿部ゼミの皆さん、その他色々な形で私達を支えてくれた方々への感謝と御礼を申し上げたいと思います。